引切

竹の目客つきに向べからず、印の文字にて料簡すべし、總而置合せたる道具、其外取さばき等、替替我身に對する事なり、引切の大さ釜の蓋に應ずべし、高さも同前、

〔茶之湯六宗匠傳記五〕小堀遠江守宗甫公自筆の寫

唐物の蓋置は、古の物、かねの物、共におしなべて總名を夜學のふた置と申ならはし候、其子細は、夜唐にては學問をする時分に、此ふた置を置、かわらけにあぶらを入、とうゑんをたふと入、火をともし、卓の上に置、何にても書物を見るために、夜學の蓋置と云、

〔貞要集三〕蓋置之事

一蓋置は、榮螺、五德、夜學、印判穗屋香爐、其外見立次第蓋置に用ひ申候、竹輪は紹鷗作にて、茶屋に置合申候を、利休小座鉢に用來り申候、〇略中總而蓋置を隱架と云也、此心は、水覆の内に入、臺子に置候は、架に隱すと云儀なり、それを五德の蓋置計を隱架と云は誤也、

〔茶譜十七〕一利休流蓋置青竹ヲ用、尤根竹ヲ用コトモ有、然ドモ根竹ハ老人ナド用テ吉、若輩成者ハ青竹ヲ用テ潔ト云々、鋸ノメ細成ヲ以、皮メニ疵不出來樣ニ引切テ、鋸メヲ用、小刀ヲ以切口ヲ繕ベカラズ、節ニ穴ヲアケテ吉、穴ノ丸ク美成ハ、ヌルイト云テ嫌、〇略中竹ヲ能々洗ベシ、節際ノ黑ト垢、或ハ白キ竹ノサビヲ念ヲ入、疵ノ不付ヤウニ洗テ吉、竹ノ中ハ鹽ヲ少入、楊枝ヲ以洗ベシ、

〔茶傳集九〕一引切の寸法、長サ一寸六分、節ゟ上四分、差渡一寸六七分程能候、竹を逆にして用、枝の有竹、枝の元少し置て切も吉、他流に而は上節中節といふ事有由、當流〇尾一に而は夏冬別儀なし、節の眞中に穴明ケ方口傳也、

〔槐記〕享保十四年二月十八日、參候、世ニ用ユルカクレガト云コトヲ、先日モ申シケレドモ、外ニ人アリシ故ニ仰ラレズ、〇近衛家熙今ノ人、五德ノ蓋置ノ名ヲ、カクレガト云ト覺ヘタルハ、大ナル僻事